

InfoUnity® **MONO**は、複数の既存システムが保有するデータソース (RDB、Excel、Access等) への問い合わせを一元化することができる製品です。アプリケーションはInfoUnity® **MONO**を利用することにより、その背後にあるデータソースの実体を意識することなく、データを透過的に利用することが可能となるため、従来の手法に比べて、分散データを利用するアプリケーションの開発をはるかに容易に実現します。またInfoUnity® **MONO**上に登録されたオブジェクトに対して、ユーザー/グループ単位でのアクセス制御機能も提供しており、すべてのアクセスに関するIPアドレス、ユーザID、発行されたSQLなどをアクセスログとして記録することができるため、不正アクセスの抑止と、万一の際の迅速な対応が可能となります。

導入事例

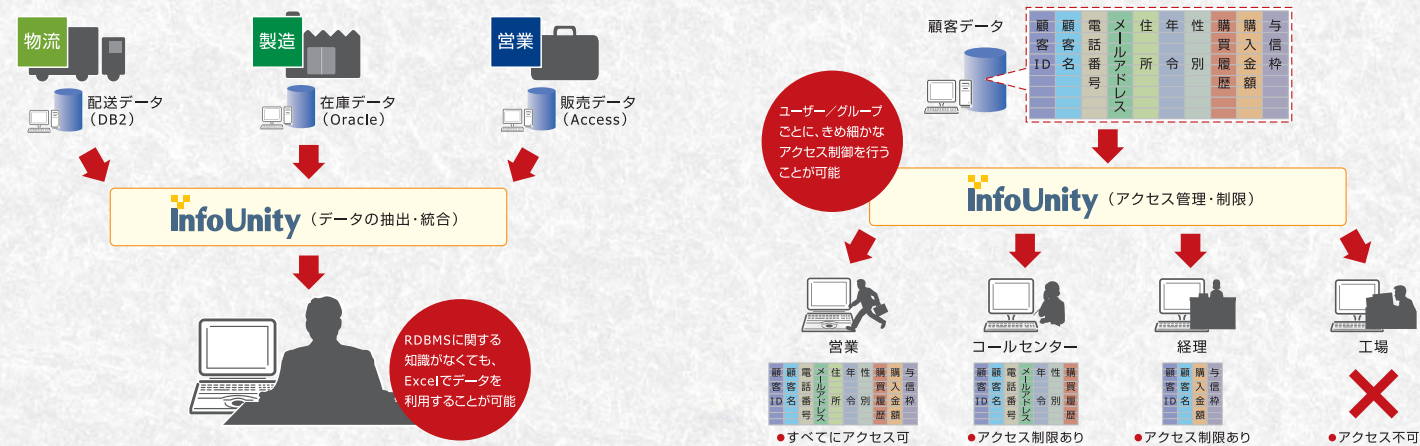


普段使っているExcelで 社内のデータを自由に利用

社内に蓄積されたさまざまなデータを集めて、業務に活かしたい。でもデータ形式がバラバラで自分でデータを集めることができない——よくある話です。このような場合、情報システム担当にデータ収集を依頼することになりますが、多忙を理由に嫌がられたり、欲しい時にデータがすぐ手に入らなかったり……。これでは業務が進みません。InfoUnity®なら、日頃使い慣れているExcelからOracleやMS SQL Server等の異なるRDBMSやAccessのデータを簡単に利用可能。必要な時に必要なデータを、今のスキルで自由に利用することができます。

情報漏洩の抑止と 自由な情報利用の両立

日々の売り上げ、在庫状況、お客様の購買履歴など、社内に蓄積されているさまざまな情報をいつでも自由に利用したいという要求はますます高まっていますが、安易な情報公開は情報漏洩の危険性を孕んでいます。そのため利用者やその業務内容、ニーズに合わせた適切な管理が必要となりますが、そのために運用管理が煩雑になってしまったりは利便性が失われてしまいます。InfoUnity®なら、利用者の役職・職制や業務内容、ニーズに合わせたきめ細かい管理が簡単な設定だけで可能。データベースに関する高いスキルや煩雑な作業は不要です。さらにすべてのアクセスに対して「日時/ユーザー名/IPアドレス/発行したSQL」をログとして記録するなど、情報漏洩を抑止し、安全で効率の良い情報公開を実現します。



●本カタログに記載の内容は、2005年8月現在のものです。なお内容は予告なく変更する場合があります。
●本カタログに記載の各社社名、製品名、ロゴデザインは、各社の登録商標あるいは商標です。

The screenshot displays the '定義作成ウィザード - 定義タイプの指定' (Definition Creation Wizard - Specify Definition Type) window. It prompts the user to '作成するリソースの種類を指定してください。' (Specify the type of resource to be created). The options are:

- Location:** InfoUnityで統合するデータソースへの接続定義を作成 (Create connection definition for data source to be integrated by InfoUnity)
- Entity:** データソースに含まれる、データの集合単位「エンティティ」を定義する (Define 'Entity', a unit of data collection contained in the data source)
- View:** エンティティもしくはビューを組み合わせて、仮想的なエンティティを作成する (Create a virtual entity by combining an entity or view)

 Below the wizard is a table of data types:

BIRTHDAY	Timestamp	TIMESTAMP	BIRTHDAY
RANK	Decimal	DECIMAL	RANK
ENTRY_DATE	Timestamp	TIMESTAMP	ENTRY_DATE
CUSTOMER_ID	Decimal	CUSTOMER_ID	
ZIP	Decimal		
PROVINCE	VarChar		
CITY	VarChar		
ADDRESS1	Char		
ADDRESS2	Char		
TEL	VarChar		
CUSTOMER_ID	Decimal		
SALE_ID	Decimal		
SALES_ID	Decimal		
SALES_NAME	VarChar		
USER_ID	Integer		
CUSTOMER_ID	BigInt		

 To the right, a 'ユーザ/グループの選択' (Select User/Group) screen shows a list of users/groups:

名前	種類	説明
administrator	グループ	
usergroup	グループ	

 The interface also features a vertical sidebar on the left stating '一元管理しログとして記録' (Manage centrally and record as log) and 'すべてのデータアクセスを' (All data access). A bottom section states 'データベースの違いを意識せず ひとつのDBとして利用可能' (Use as one DB without noticing database differences) and '誰にでも 簡単・自由なデータ利用を促進' (Promote simple and free data usage for everyone).

自社にある情報をコントロール／開示権限を持つことで、自由な情報利用を促進する。



所在地：東京都港区東新橋1丁目9番1号
 代表者：代表取締役社長 兼 CEO (最高経営責任者) 孫 正義
 設立：2000年(平成12年)5月16日
 合併：2003年(平成15年)1月7日
 資本金：1,480億円(平成17年3月末現在)
 事業内容：「Yahoo! BB」を中核としたブロードバンドにおけるインフラや各種サービスの提供、および技術開発から営業、販売、サポートまでを一貫して行う。IT関連の流通事業とサービスを提供し、ブロードバンドやイーコマースの関連事業会社を統括、管理する。



情報システム第一部
流通システム部 流通システム課 課長
松田 恭典 氏



情報システム第一部
流通システム部 流通システム課 マネージャー
畠山 貴之 氏



情報システム第一部
流通システム部 流通システム課 マネージャー
上村 亮 氏



情報システム第一部
流通システム部 流通システム課
田中 直樹 氏

1981年の創業以来、ソフトバンクではIT関連商品・サービスの流通を重要なビジネスとして展開している。流通事業は現在、ソフトバンクBB株式会社に受け継がれ、ブロードバンドサービス事業と共に、同社の屋台骨を支えている。そして今回、InfoUnity® MONOを導入したのが、何十万にも上るIT関連商材を扱っている、同社の流通部門なのである。

InfoUnity® MONO 導入前の状況

ソフトバンクBB株式会社(以下ソフトバンクBB)の流通事業部門では、Webや店舗を通じて販売された商品販売データを基に多角的な分析を行い、日々の業務を遂行している。当然このデータは利用頻度が高く、特に月初などはデータの利用が集中するため、情報システム部門が各部署からの要求に応じてひとつひとつデータを提供していたのでは業務が滞ってしまう。そこで情報システム部門はあらかじめ必要なデータを基幹システムから抽出し、集計・テーブル化した後、独立したEUC(End User Computing)サーバへデータを投入。各部署のユーザは情報システム部門から集計用に配付されたツールを用いて、各自EUCサーバからデータを取得することとした。

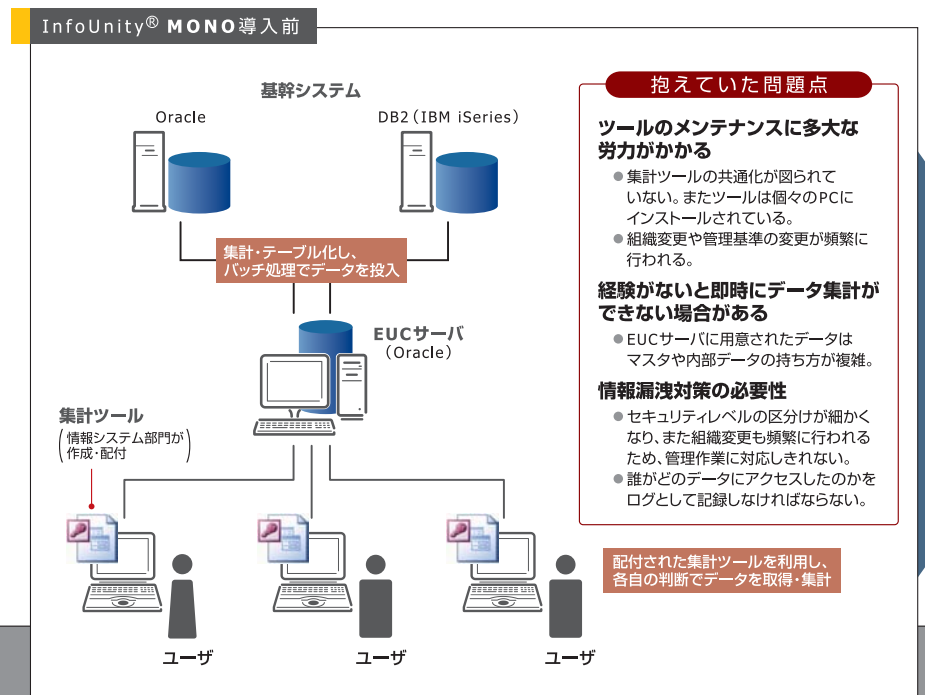
当初は効率的に機能するものと期待されていたこの方式だが、徐々に問題が生じてきた。まず集計用として各部署に配付したツールのメンテナンスに多大な労力がかかるようになった。このツールは情報システム部門がAccessを用いて作成。配付されたユーザは自己のPCにインストールして利用していたが、部署により必要とするデータ項目が違うケースもあるため、集計ツールをカスタマイズする必要が生じた。また情報システム部門が配付したツールとは別に個人が独自で作成したツールなども存在したため集計ツールの共通化が図れず、ツールのバージョンアップに手間がかかってしまう原因となった。そして頻繁に行われる組織変更や管理基準の変更が、より一層の拍車をかけた。

EUCサーバ側にも問題があった。情報システム部門が用意したデータは汎用性を持たせるためにマスタの持ち方や内部データの持ち方が複雑なため、多少なりとも経験がないとデータを集計するのが難しい。そのため業務が滞ってしまうこともたびたびあり、当初期待していたほど業務の効率化が図れずいた。さらに情報漏洩対策という、新たな課題も生じていた。ソフトバンクBBでは「情報セキュリティ管理体制の構築・強化」に全社を挙げて取り組んでいるが、その一環として社内のデータ利用についても詳細な権限管理規定が定められた。今までもユーザがEUCサーバへログインを行う際にはID・パスワードによる認証が必要であったが、セキュリティレベルの区別が細かくなった上に組織変更が頻繁に行われるため、情報システム部門にかかる負荷がさらに増大し、管理作業に対応しきれない恐れも出てきた。また会社の基本ポリシーとして、「誰がどのデータにアクセスしたのか」をログとして記録することが新たに求められた。

InfoUnity® MONO 採用の理由

— 今まではツールのメンテナンスに非常に苦勞されていたということですが。

【畠山】 はい。Accessに詳しい人が自分で作ったクエリや、何世代も前のクエリツールが各部署で引き継がれていたりするので、どういう種類があるのかも把握できていませんでした。



【上村】 独自にクエリを作ってしまったツールを各自のPCにローカルで持っているのが現状でした。それに対するメンテナンスは個々にバラバラにやっていたので、その部分を解決しよう。つまりInfoUnity側に今のクエリとなるものを全部置いてしまおうという発想です。社内ですべてを一元化し、管理したいということですね。

【畠山】 それに今まではEUCサーバにあるデータは部長から新入社員まで同じものを見ることができたので、これも何とかしなければならなかったわけです。最初から権限を与えられた範囲のデータをInfoUnity側で、営業部門、仕入部門、管理部門とそれぞれに見せるテーブルを分け、グルーピングしようということですね。

— 権限管理をすることで工数削減にもなるわけですね。

【畠山】 権限によって選べるデータを制限することによって、余計なものを選ばなくて済む、というか、抽出の選択が狭まるじゃないですか。そこでチョイスする部分だけでも工数は減ると思います。今まではユーザが「これっているのかな、いらぬのかな」と悩んでしまう場面がありました。今まではユーザが「これっているのかな、いらぬのかな」と悩んでしまう場面がありました。今まではユーザが「これっているのかな、いらぬのかな」と悩んでしまう場面がありました。

— 今までそれはすべてユーザが判断しなければならなかったわけですね。

【畠山】 そうです。「こういうデータはどこにあるんですか?」「これはアップされていますか?」という問い合わせも日々あるので、その対応もする必要がありました。今まではここまで見ることができませんから、この中でやってみよう」というふうに表示できるようになりました。

— InfoUnityの機能で特に注目されたのはどの部分ですか。

【上村】 ひとつは、やはりログ取得の部分ですね。これはなくてはならない要素だったので。あとは、先ほどのアクセス権限のところですね。

【畠山】 セキュリティ強化とアクセスの権限を設定することによって、要は負荷が下がって、早く使えるようにしよう。効率化の部分と、それに合わせて使いやすさというか、入りやすいということがありますね。

— アクセス管理ということで、実際にどの位細かく権限管理されるのでしょうか。

【上村】 まだまだこれからですね。営業、仕入れ、管理、そこからまた細分化されますけど。

【畠山】 敢えて言うならもうひとつ、情シス部門というのがありますが、現場で運用するのは基本的にはその3つですね。

— その3つに対して、役職ごとに権限を設定するということですか。

【上村】 ゆくゆくは運用しながら細分化させていくつもりですけど、まずは最低限その3つから始める予定です。

【畠山】 いきなり現場/マネージャー/部長とか、統括とかに分けても複雑になるだけなので、まあ運用状態を見てからになるかと。

— 組織変更もかなり頻繁に行われると伺っていますが。

【松田】 組織変更といっても、大きく部門が変わるわけではないですけども、内部的には結構ちょこちょこ動きます。また例えば数字を拾うというのであれば、営業的に数字を拾うのか、バイヤー的に、その商品管理している数字を拾うのか、そういうところでも権限とかを変えていきたいとか、いろいろありますね。

— どのくらいのユーザでお使いになる予定ですか。

【田中】 実ユーザ数でいうと150から200というところだと思いますが。

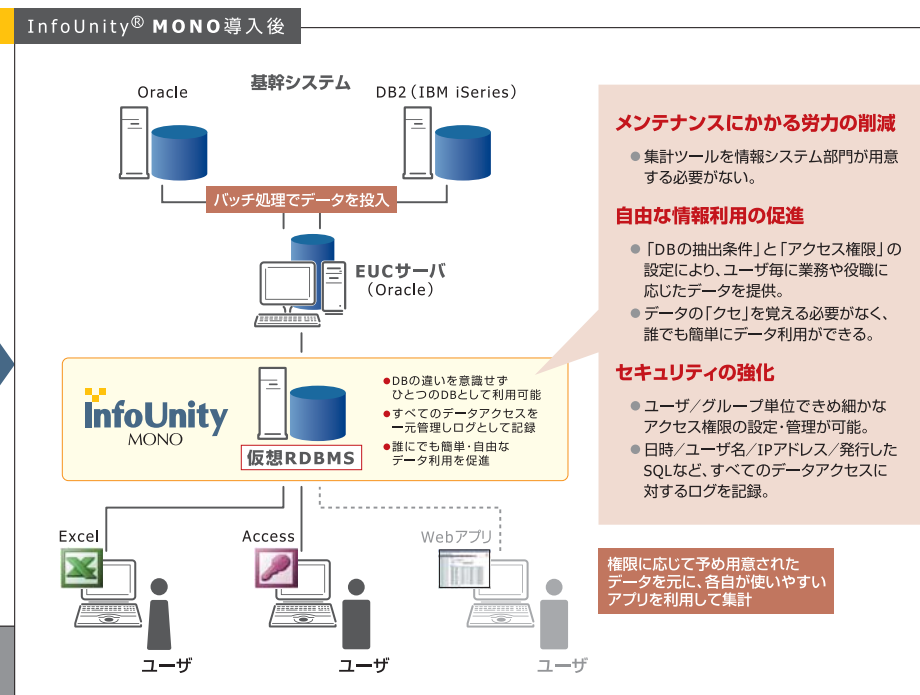
【松田】 アカウント発行数でいうならば、1,000近くですね。ただ実質アクティブにガリガリ使うかどうかという話になってくると、まあ150から200ですね。

— ログの取得が必須ということでしたが、現状はどのようにログを取得されていたのですか?

【松田】 実際のところ取っていることは取っているけれども、活用できていないのが現状です。

【田中】 EUCサーバに対して誰がいつ接続したか、くらいしか分かりませんでした。

【松田】 現状では活用できていませんが、今後ソフトバンクBBとしてのセキュリティポリシー上は必ずログを取って、しかるべきタイミングですぐに出せる、トレーサビリティができるというのが基本ポリシーになっています。しかし個々のDBの技術的な部分に入り込んでいくと、それができる技術者が今までいませんでした。



今回InfoUnityを導入したのは、ログの管理も非常に容易です。よ、と。その部分の開示というか、確認の方法もすごく簡便なので、ある製品の特別な知識がなくても使えるという部分が大いだと思います。

— 今後はEUCサーバだけではなく、基幹システムにも直接つなげていけるのでしょうか。

【松田】 今のタイミングで基幹システムに直接は考えていないですね。やはりEUC側に全部データを持ってきて、そこを触らせると。ただEUCの弱点としては日次バッチというものがあって、当然リアルタイム性がないので、そのリアルタイム性のニーズが高まってくると、当然その直結なり、リアルなデータを触るって必要があるのでは、多分そこを兼ね合いだな、と思っています。

今後、よりスピーディな情報取得、それと情報分析、そこから戦略化ということが必要になれば、そういうことを考えていく必要があります。よりスピーディな情報取得、店舗の実売の実績とか、日々の売り上げデータのところは、実際にニーズがないわけではないので。「今実際に売り上げているのはいくらなんだ」と、トラッキングベースで、例えば基幹システムを見たら数字は分かるんだけど、全体管理している数字の中でどこまで進捗しているのかは、現状は手作業でないと分かりません。ボタンひとつで昨日までの実績と今日の実績を出して、まさに今、例えば17:10まででこの数字です、っていうのが欲しいっていうのは、ひょっとしたら今年度の終わりのくらいまでには言われそうな雰囲気ですね。

— 現在クライアントで使用されるアプリはAccessとExcelということですが、今後Webアプリを開発される予定とかはございますか。

【松田】 AccessとかExcelではなく、画一的な集計のパターンをWebアプリで出すっていうのが今の流れだとは思っているんですが、開発リソースがちょっとないっていうのが正直なところですね。

ただ今回InfoUnityを入れることによって、もう一回その現場がやっている業務っていうものを、どんどん見直していくタイミングだと思っています。BPR(ビジネス・プロセス・リエンジニアリング)って言うところまでいかどうかは分からないけど、まずは統一的にやってみて、その結果みんなが使えるものはここに寄せよう、と。また逆に、やはり人それぞれで、もしくはチーム単位で、ちょっと色が違うねということであれば、個別のユーザごとに特化したツールにしよう、といったより分けを今後していくべきだというふうにも思っています。

— 単純にツールを入れて終わりということではなく、これをきっかけに業務の方もどんどん変わっていくだろうと。

【松田】 そうですね。実際の業務分析と、それを再構築して、より効率的なかたちにすると。そのためのプラットフォームとして、今後InfoUnityに期待しています。

— 単純にツールを入れて終わりということではなく、これをきっかけに業務の方もどんどん変わっていくだろうと。

【松田】 そうですね。実際の業務分析と、それを再構築して、より効率的なかたちにすると。そのためのプラットフォームとして、今後InfoUnityに期待しています。

お問い合わせ先
 イーズ・コミュニケーションズ株式会社
www.i-ze.com
 〒106-0047
 東京都港区南麻布2-12-7 南麻布TMDビル4F
 TEL: 03-5427-5977 FAX: 03-5427-5832
 E-mail: info@i-ze.com

●本カタログに記載の内容は、2005年8月現在のものです。なお内容は予告なく変更する場合があります。
 ●本カタログに記載の各社社名、製品名、ロゴデザインは、各社の登録商標あるいは商標です。